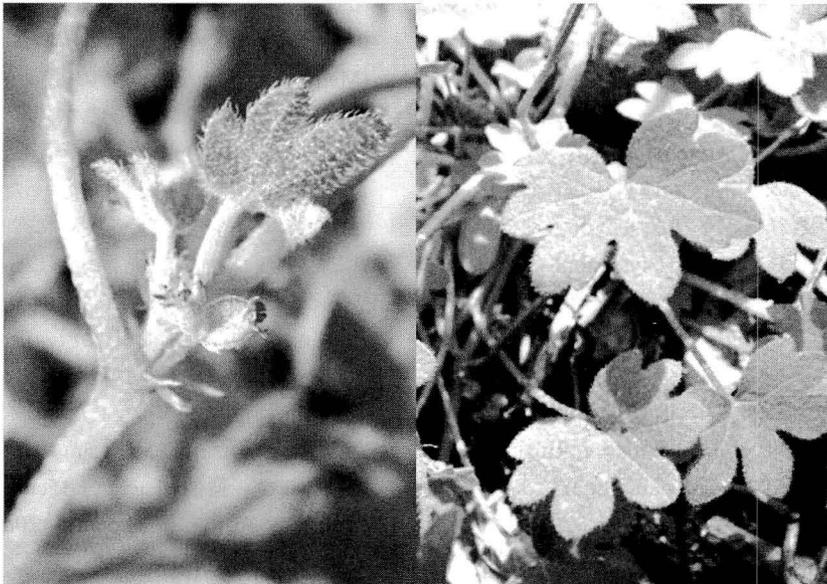


FLORA KANAGAWA

Feb. 10. 2010 No.69

神奈川県植物誌調査会ニュース第 69 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



ホシゲチドメグサ 左：(藤沢市大庭 2009 年 3 月 31 日 埜村恵美子 撮影)、本文
836 頁参照。

目次

勝山輝男：セリ科の新帰化植物ホシゲチドメグサ	836
酒井藤夫・酒井啓子：藤木のウラボシノコギリシダ	836
北川淑子：横浜で 75 年ぶりにツレサギソウを記録	837
久江信雄：続 三増のヒメフタバラン	837
久江信雄：(ニセ) コクモウクジャク?	838
長谷川義人：温暖化による南方植物の露地栽培と逸出	839
田村 淳：サンショウバラは丹沢の三国山以北にもある	840
秋山幸也：相模原市でコマツカサススキを確認	841
増子忠治：アオフタバランとクロハシテンナンショウ	842
吉田三夫：ハリグワを確認	843
田中徳久：茅ヶ崎市でコバナヤマモモソウ	843
浜口哲一：市街地のクスノキに着生したシノブ	843
芹沢俊介：ハコネキンミズヒキとノキンミズヒキ	844
浜口哲一：セイヨウイボタの花について	846

850 頁へ続く

セリ科の新帰化植物ホシケチドメグサ

(勝山輝男)

調査会会員の埜村さん、野津さん、佐々木シゲ子さん、和田さん、浅野さん、岸さんが2009年3月31日に藤沢市の大庭遊水地でチドメグサ属に似た小型のセリ科植物を採集された。花序や果実の形態はチドメグサ属に似ているが、茎、葉、果実などに星状毛がある。日本産に該当するものがないので、アメリカなどの海外の植物誌を調べたところ、Abrams (1951)、Constance (1993)、Diggs et al. (1999) により、南米～アメリカ合衆国南西部（カリフォルニア州やテキサス州など）原産の *Bowlesia incana* Ruiz et Pav. と判明した。*Bowlesia* 属は南米に約15種がある比較的小さな属で、アメリカ合衆国に分布が及ぶものは本種のみである。インターネット上で *Bowlesia incana* で検索すると、いくつかの画像がヒットし、大庭遊水地の植物と同じものが表示された。本種が大庭遊水地で発生した原因は不明であるが、Diggs et al. (1999) によるとテキサス州北部では芝生の雑草として急速に広がったというので、広がらないうちに駆除した方が良さそうだ。和名はチドメグサ属植物に似て星状毛を持つのでホシケチドメグサとした。

ホシケチドメグサ *Bowlesia incana* Ruiz et Pav. in Fl. Peruv. 3: 28, pl. 268, f. a (1802)

小型の1年草。茎はよく分枝して斜上し、高さ5～10cm、星状毛を散生する。葉は基部では互生し、上部では対生、長さ2～5cmの柄があり、葉身は腎形で、長さ1～1.5cm、幅1.5～2cm、5～7中裂し、裂片は全縁で鈍頭、両面に星状毛がある。散形花序は葉腋につき、長さ2～5mmの柄の先に、1～3花をつけ、小花柄はきわめて短く、苞は披針形で薄膜質、長さ0.5～1mm。花はきわめて小さく、径1mm以下、花弁は紫色。分果は長さ1.5mm、幅1mm、全体に星状毛がある。

標本：藤沢市大庭 大庭遊水地 埜村恵美子
ほか 2009.3.31 KPM-NA0136651; KPM-NA0136652); 同 2009.4.19 KPM-NA0136653.

引用文献

- Abrams, L. 1951. Illustrated Flora of the Pacific States, Vol. 3. 866pp. Stanford University Press, Stanford.
Constance, L., 1993. Apiaceae. in J. C. Hickman

ed. The Jepson Manual: Higher Plants of California, pp. 136-166. University of California Press, Berkeley, California.

- Diggs G.M., Lipscomb B. L. & O'Kennon R. J. 1999. Illustrated Flora of North Central Texas. 1626 pp. Botanical Research Institute of Texas and Austin College, Fort Worth.

藤木のウラボシノコギリシダ

(酒井藤夫・酒井啓子)

2009年3月15日に相模原市城山町藤木でウラボシノコギリシダを確認した。『神植誌01』によると、イヌワラビ *Athyrium niponicum* (Mett.) Hance とウラボシノコギリシダ *A. sheareri* (Baker) Ching の雑種であるホクリクイヌワラビ *A. ×saitoanum* (Sugim.) Seriz. が横須賀市で採集されているが、本種の記録はなかった。

私たちは、落葉している冬期に今までに調査したことがない場所や、危険を感じる程に鬱蒼として入ることが出来なかった場所の調査を行ってきた。今回の生育地もそうした沢のひとつである。

常緑のシダを調査しながら沢をつめて行き、沢幅が1m程度に狭まったあたりの木洩れ日の当たるなだらかな斜面に約1.5mの範囲で約10株を確認した。葉柄約3cm～15cm、葉身の長さ約7cm～30cm、幅約5cm～20cmの裸葉のみである。付近にはイノデ・アイアスアイノデ・イワガネソウ・フモトシダ・ミジシダ・ハカタシダ・リョウメンシダ・カンスゲ・アオキ・タマアジサイ・ホオノキ・コナラなどを確認した。

相模原市立博物館の宮崎卓氏に連絡したとこ



ウラボシノコギリシダ (相模原市城山町藤木 2009年3月15日 酒井藤夫撮影)。

ろ、宮崎さんと親しい植物学者は、「ウラボシノコギリシダの発見は快挙です。私も津久井湖が出来る以前の1965年頃に津久井町で採集した記憶があります。そのときの標本は東北大学標本庫に未整理のまま残っているかもしれない」と話されたそうで、現在その場所は津久井湖の湖底に沈んでしまったとの情報をいただいた。

また、この付近の杉林下で、2009年3月20日にナガサキシダ1株も確認しました。

続 三増のヒメフタバラン

(久江信雄)

ヒメフタバラン *Listera japonica* Blume は、『神奈川県植物誌 2001』、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』で絶滅種とされていたが、2006年に山本絢子、勝山輝男の両氏らにより箱根で再発見された(勝山, 2006)。さらに、三増峠付近の記録が『津久井城山及び三増の植物』(東京薬科大学, 1983)にあったが、2008年4月、山口により愛甲郡愛川町三増峠近くで再発見された(山口, 2008)。

2009年3月28日、相模原市津久井町根小屋の三増峠近くのやや明るい尾根上にもヒメフタ

バランが生育しているのを確認した。幼植物を含めて11株を認め、その内3株は花を咲かせていた。ヒメフタバランは、『津久井城山及び三増の植物』や山口(2008)の報告によると、1ヶ所にかかなりの個体数が見られることから、この地域に長い間絶滅することなく生育し続けていると考えられる。

標本：相模原市津久井町根小屋 久江信雄
2009.3.28 SCM39020.

引用文献

勝山輝男, 2006. ヒメフタバランが健在. *Flora Kanagawa*, (62): 770-771.

山口勇一, 2008. 三増のヒメフタバラン. *Flora Kanagawa*, (67): 820.

東京薬科大学植物研究部, 1983 津久井城山及び三増の植物. 53pp.



ヒメフタバラン (相模原市津久井町根小屋
2009年3月28日 久江信雄 撮影).

ていなかったが、下部羽片の柄が異様に長いことと小羽片の形はやや広めの三角状披針形であることが印象に残った。この時は、別の調査目的があったためシダは後回しにして根小屋方面へと足を急いだ。

帰宅後、気になっていたのもそのシダを再度思い起こしてみたが、ノギリシダ属のシロヤマシダに近いシダに行き着いた。標本を採って詳細に検討したところ、初めて見る暖地生のシダに間違いなく、葉は中部から上部にかけて羽片の小脈が所々分岐していたことから、シロヤマシダではないかと見当を付けた。ところが、葉柄の鱗片は落ちてしまって無いと思っていたが、よく観察するとわずかに残っていて、黒色の細い鱗片で縁に小突起があったためシロヤマシダ以外の可能性が出てきた。因みに、葉の形は、保育社『しだの図鑑』や平凡社『日本の野生植物 シダ』の中の写真と比較すると、シロヤマシダよりも(ニセ)コクモウクジャクの方に近かった。

そこで、生命の星・地球博物館の標本を検討したところ、小脈の分岐の有無は明快な区別点にならずな区別点にはならず、(ニセ)コクモウクジャクでも小脈は単条のみならず分岐することもあることが分った。そこで、このシダはシロヤマシダではなく、コクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunze var. *virescens* またはニセコクモウクジャク *Diplazium virescens* Kunze var. *conterminum* (H.Christ) Sa.Kurata と考えられた。ニセコクモウクジャクはソーラスが辺寄りにつくことで母種のコクモウクジャクと区別されている。

その後も観察を続けているが、5月中旬に新芽が出、6月中旬に葉が4枚展開したが、今年も

(ニセ)コクモウクジャク?

(久江信雄)

2009年3月21日、相模原植物調査会の鹿島敏夫さん、菅沼広美さんとで愛甲郡愛川町～相模原市津久井町根小屋の植物調査に出掛けた折、上三増の栗沢水系で、スギとヒノキが混植され、アオキの生えている湿った林床に、全長20-50cmの葉を4枚ほど出しているシダの一群に出合った。見慣れないシダであり、下部羽片の柄がオオベニシダのように長く、前年に展開した越冬葉は青々として残っていて、前々年の葉はほとんど茶色に変色していた。ソーラスはつい



(ニセ)コクモウクジャク? (愛甲郡愛川町三増 2009年
3月23日 久江信雄 撮影).

ソーラスはつかなかったので、コクモウクジャクかニセコクモウクジャクかは同定できていない。

『神植誌 01』によると、これまでにコクモウクジャクが逗子市で、ニセコクモウクジャクが小田原市や南足柄市、秦野市で発見され、それぞれ神奈川県が北限新産地であった。今回の産地は、これらのいずれの産地よりも北に位置することから、新たな北限新産地となろう。報告にあたり、生命の星・地球博物館の標本を閲覧させていただいた。また、宮崎 卓氏からは貴重なアドバイスをいただいた。

標本：愛甲郡愛川町上三増 久江信雄 2009.3.23
KPM-NA0136942

温暖化による南方植物の露地栽培と逸出

(長谷川義人)

南方の熱帯・亜熱帯の草本帰化植物は報告が多いが、移植 *transplanting* により、更そこから逸出植物 *escaped plants* として順化 *acclimatization* する木本性の植物が温暖化によって増加するのではないかと予感している。耐性 *tolerance* のうち耐凍性 *frost resistance* を持てば現在の神奈川県は温暖な気候なので、直ぐにでも生態的地位 *ecological niche*、生息場所 *habitat* は得られるであろう。最近の自宅周辺の観察をまとめて報告することにした。

1. ダイジョ *Dioscorea alata* L. (ヤマノイモ科)

元来、南方に自生のある植物であるが、国内でも三重県、千葉県、九州、沖縄で栽培がある。星川清親『食用植物図説』によれば品質は優良であるが寒さに弱いという。これを横須賀市の池上十字路の先の大楠山登山口の上で見たことがある。最近この植物の野化したものを南方のグアム島アブラ軍港の近くで見た。茎に狭い翼があるので見誤ることはない。通例、「むかご」が出来ないといわれているがここではただ1個を見た。グアムで横井庄一氏が食べていたのはトゲドコロ *Dioscorea esculenta* (Lour.) Prain & Burkill で、多肉根(塊茎)の周囲に針状となった根茎が取り巻いている。

2. ジュズサンゴ *Rivina humilis* L. (ヤマゴボウ科)

熱帯アメリカ原産の草本状低木で小笠原に帰化しているのは周知であるが、最近私の住む横

浜市内の自宅の近辺で何箇所も越冬個体を見ている。秋季、美しい真紅の実をつける。葉質は薄い低木のため幹の耐寒性は相当強い。発芽力が強いので道端からさらに広がると予想される。

3. タイワンツバキ *Gordonia anomala* Spreng. (ツバキ科)

台湾、香港、南中国原産のツバキの近縁属の種。白い花が咲く。南区井土ヶ谷上町の民家に植栽され毎年よく開花する。友人の保土ヶ谷区権太坂の大見川農園大見川邦司氏もこの樹を所有している。氏は香港の *Camellia granthamiana* Sealy も所有し、これらは露地栽培なので耐寒性は充分なのであろう。大見川氏は植木屋さんとは思えない学識者で学名を記憶されていて、昔の金沢区富岡、春及園の故鈴木吉五郎氏を彷彿する方である。以前横浜公園のパザーに出品していた。

4. キバナアマ *Reinwardtia indica* Dum. (アマ科)

インド原産の低木で、純黄色の美しい花を觀賞するために沖縄など暖地に早く導入された。逗子市沼間の神武士車道参道に植栽されたが、最近種子繁殖で周辺に拡散している。花の無い標本を初島住彦先生に同定して頂き、2008年4月5日、満開の時期に花の標本4枚を製作した。

5. アカギ *Bishopfia javanica* Blume (トウダイグサ科)

雌雄異株の大高木。本稿を書きかけとなった最大のサプライズ。自宅から1.5kmの横浜市南区六ッ川1丁目の「平戸・桜木道路」に面した民家に樹高3-4mの樹が2本ある。この六ッ川谷の樹は勢いが良い。この樹は種小名の *javanica* (ジャワ産の) の意味するようにインド、マレー、フィリピン、太平洋諸島、インドネシア、オーストラリア原産。日本では奄美、小笠原、沖縄に移入され街路樹に賞用され、また山中に逸出した樹がある。南方の樹種であるが相当に耐寒性があるらしい。凍傷を起こした形跡がない。

6. ハウチワノキ *Dodonaea viscosa* L. (ムクロジ科)

津久井の根古屋バス停留所前の民家に鉢植になった紅葉した得体の知れない樹があった。不明のまま、今度は南区弘明寺の家の近くで同じものがあり、花期にそれを見て直ぐこの樹が何者かが氷解した。このハウチワノキは最初マリアナ

群島ロタ島の西港で採集し、次は徳之島北部の手手と金見の間の道路沿いの自生品である。この低木が植栽に導入されていることを初めて知った。円盤状の蒴果の珍しさとで植栽され、花は見栄えがしない。耐寒性があるらしい。蛇足と思うが、ウチワノキ *Abeliophyllum distichum* Nakai (モクセイ科) は朝鮮特産の別物で、稀に栽培される。以前南区大橋町で見たことがある。

7. タイワンツナソ *Corchorus olitorius* L. (シナノキ科)

俗名モロヘイヤで、以前、磯子区氷取沢町から市民の森へ行く耕作地に栽培のものを見た。インド原産の1年生の熱帯植物であるが、これも温暖化で野生化するであろう。元来繊維採取の作物であるが、その後葉菜としての人気から、各地で栽培のものを見る。次期植物誌に採録したい。

8. シマトネリコ *Fraxinus griffithii* C.B. Clarke (モクセイ科)

10年来、観賞樹として街路や庭園、室内置ききの観葉植物として何処でも見られるようになった。横浜市のみならずみらいや八景島などにも植栽され、種子繁殖の子苗が沢山見られる。『神奈川県植物誌2001』のモクセイ科は筆者が記述したが、この種が爆発的に植栽されるようになったのは最近のことであろう。次期植物誌収録の候補である。温暖化が進むと室内で管理されていたものが露地に出され、そこから周辺に広がる。南方の隆起石灰岩に生ずるゲッキツ *Murraya paniculata* Jack. (*M. exotica* L.) (ミカン科) など、その予備軍は沢山ある。

9. トウワタ *Asclepias curassavica* L. (ガガイモ科)

花が熱帯系のため原色で目立つ。観賞用として栽培されるが、野外で保つとは考えもしなかった。昨年、南区井土ヶ谷中町の電柱脇に生じた株は勢いが良い。熱帯アメリカ原産で東南アジア、大洋州では道端に普通。

10. フウセントウワタ *Gomphocarpus frutescens* R.Br. (ガガイモ科)

随分昔になるが、初山泰一先生などと三浦半島を歩いている頃、横須賀市秋谷の山中で畑の脇に植栽されていた。その頃、この種は花屋を経由して爆発的に殖えた。街中のものは未だ取播きのことが多いが、海岸近くの秋谷のものは年

中、そこにあつた。多年生の低木なのであろう。

11. ヤナギバルイラソウ *Ruellia brittoniana* Leonard (キツネノマゴ科)

前号で田中京子氏が報告した(田中, 2009; Flora Kanagawa, (68): 828-829). 弘明寺観音橋上流の護岸のもの。直ぐ上の民家で栽培されているものの種子から洩れた。メキシコ原産であるが、沖縄では早くに入り、筆者は以前、西表島の琉球大学熱帯生物学研究所の施設でチリメンナガボソウと一緒に植栽のものを見ている。花が綺麗なので植栽されるが、越冬時、茎が竹のようになり耐寒性の強いものである。将来害草となる懸念がある。家の近くの南区井土ヶ谷中町の民家でも栽培されている。種子で繁殖する。

[MAY,13,2009 記]

サンショウバラは丹沢の三国山以北にもある

(田村 淳)

丹沢山地では三国山～不老山にかけて分布するサンショウバラ *Rosa hirtula* (Regel) Nakai を三国山以北と丹沢山地の北に位置する道志山塊において確認したので報告する。

サンショウバラは富士山周辺と箱根、伊豆、丹沢などのブナ帯の林内や林縁、草原に生育するフォッサ・マグナ要素の低木である(高橋, 1971)。『神奈川県植物誌2001』によると県内では箱根に多産し、丹沢では西丹沢不老山～三国山にかけての尾根筋に生育すると報告されている(堀内, 2001)。この報告をもとに勝山ほか(2007)もサンショウバラの丹沢での分布を不老山～明神峠間とした。静岡県内での分布は、杉本(1984)によると、伊豆鞍掛山・函南山、小山、富士山・愛鷹山・三国山脈・箱根外輪山・毛無山脈(毛無山～天子岳)・十里木道・富士市(丸火)である。山梨県内での分布は、植松(1981)によると、富士山地域、南アルプス地域、櫛形山、御坂山脈、天子山脈、丹沢山塊、富士川下流域および相模川上流域、甲府盆地である。この植松(1981)の記録から、丹沢山地の三国山以北の山梨・神奈川県境にサンショウバラがある可能性が示されていた。

三国山以北でサンショウバラを発見した場所は次のとおりである。丹沢山地では三国峠～鉄砲

木ノ頭に至る尾根沿い（神奈川県側）と高指山～富士岬平（山梨県側）、山梨県の道志山塊では二十曲峠～子ノ神～杓子山に至る尾根沿いである。いずれも灌木の疎林内や高木林の林縁部に生育していた。このように丹沢山地の神奈川・山梨県境尾根を北上して道志山塊にもサンショウバラの生育を確認できたことは、植松（1981）の記録を裏付ける結果となる。

なお、丹沢山地におけるサンショウバラの分布は不老山～三国山間以外にも過去にいくつか報告されている。神奈川県博物館協会（1958）は、丹沢でのサンショウバラの分布を塔ヶ岳、丹沢山と報告した。林ほか（1961）は、丹沢での分布を塔ヶ岳、丹沢山、世附と報告した。その後、林が勤務していた林業試験場浅川実験林（現独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園）の収蔵標本を調べた逢沢（2003）によると、林が採集したと思われるサンショウバラの標本には種名が記載されておらず、採集日（1956.7.20）の調査ルートは蛭ヶ岳―檜洞丸―犬越路であった。このことは林ほか（1961）の記載と異なる点である。神奈川県博物館協会（1958）と林ほか（1961）の報告から塔ヶ岳と丹沢山にサンショウバラがあった可能性を否定できないが、標本が残されていないため分布を確定することはできない。逢沢（2006）は、『続々 丹沢夜話（ハンス・ストルテ著）』において1951年8月17日に丹沢山山頂で撮影された写真にサンショウバラと思われる植物があることを報告したが、写真からは同定不可能である。いずれにしても、塔ヶ岳と丹沢山の分布記録は標本が残されていないため結論づけられない。『神奈川県植物誌2001』でサンショウバラの分布を不老山～三国山としたのは、このような事情を汲んだ結果なのであろう。

引用文献

- 逢沢峰昭, 2003. 「林ほか（1961）：丹沢山塊の植物調査報告」の標本について. *Flora Kanagawa*, (55): 673-683.
- 逢沢峰昭, 2006. これまで確認されていない場所にかつて生育していた可能性を示す植物. *Flora Kanagawa*, (62): 764-766.
- 林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江, 1961. 丹沢山塊の植物調査報告. *林試研報*, 133: 1-128+16pl.
- 堀内 洋, 2001. バラ属. 神奈川県植物誌調査会

- (編), 神奈川県植物誌 2001, pp.840-845. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原. 神奈川県博物館協会, 1958. 神奈川県植物誌. 7pl.+257pp. 神奈川県博物館協会, 横浜.
- 勝山輝男・田村 淳・田中徳久, 2007. 維管束植物. 丹沢大山総合調査団(編), 丹沢大山総合調査学術報告書 丹沢大山動植物目録, pp.1-44. (財) 平岡環境科学研究所, 相模原.
- 杉本順一, 1984. 静岡県植物誌. 814pp. 第一法規出版, 東京.
- 高橋秀男, 1971. フォッサ・マグナ要素の植物. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (2): 1-63, Fig.1-172.
- 植松春雄, 1981. 山梨の植物誌. 595pp. 井上書店, 東京.

相模原市でコマツカサスキを確認 (秋山幸也)

2009年2月に相模原市津久井町の休耕田で、見慣れない大型のカヤツリグサ科の立ち枯れを見つけた。無造作に折り採って同行の宮崎卓氏にお見せすると、即座に「コマツカサスキでしょう」とのこと。そのありがたみをよく理解せぬまま相模原市立博物館へ戻り、『神植誌01』、『県RD2006』をめくってみれば、県内では横浜と川崎の2カ所にしか現存せず、絶滅危惧ⅠA類とか。これは立ち枯れだけでなく、ナマの植物も確認しなくては、ということで、ゾロメの2009年9月9日に同じ場所を再訪した。

現場は谷戸で、棚田状に連なる休耕湿地にコマツカサスキ *Scirpus firenoides* Maxim. が合



コマツカサスキ（相模原市津久井町 2009年9月9日 秋山幸也 撮影）。

計 50 株以上林立していた。一部はクサヨシなどに被われているものの、時折草刈りが行われるようで、背の低い湿性植物も多く見られた。コマツカサススキの自生由来を保証するかのように、ミズニラ *Isoetes japonica* A. Braun やイトイヌノヒゲ *Eriocaulon decemflorum* Maxim. var. *nipponicum* (Maxim.) Nakai (ともに県絶滅危惧 I B 類) が多数見られたのも特筆される。

この場所はすでに耕作放棄されており、ひとたび草刈りなどの管理の手が止まれば瞬間に乾燥し、ススキや大型の外来種に被われてしまうだろう。立地の安定性から見るとやや不安であるが、水生昆虫類等のほかの生物にも目を配りつつ、津久井地域では数少ない低湿地として今後も注目していきたい。

蛇足になるが、同じ日に道志川沿いで宮崎氏らが事前に見つけられていたマツカサススキ *Scirpus mitsukurianus* Makino も観察でき、水生植物三昧の一日だった。

標本：相模原市津久井町 秋山幸也 2009 年 9 月 9 日 SCM40065.

アオフトバランとクロハシテンナンショウ

(増子忠治)

アオフトバラン *Listera makinoana* Ohwi

2009 年 4 月 5 日、松田町寄沢から雨山峠方面に向かう途中の標高約 520m の場所で、県森



アオフトバラン (松田町寄沢～雨山峠 2009 年 6 月 19 日 黒澤隆 撮影)。

林インストラクター植物班の内野、女川、黒沢、坂齋、杉崎、村井の各氏が調査中、アオフトバランを発見したので報告する。

寄沢から雨山峠の途中の約 70～80 年生と思われるスギ造林地で、土壤がスギの生育に適する湿った場所であった。3 本の間伐材が横たわる下から少しずれた斜面に、等高線に沿うように 176 株の群落がみられ、そのうち 20 株が花芽をつけていた。

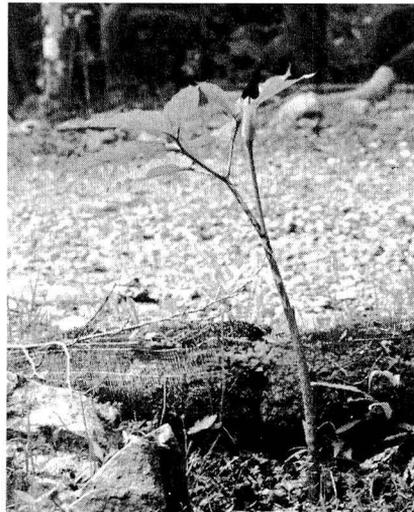
これは大発見とわくわくしながら『神奈川 RD2006』を調べると、総个体数も少なく、絶滅危惧 II 類にされていた。すぐに生命の星・地球博物館の勝山輝男学芸員に連絡したところ、世附から入った織戸峠でも確認されていると教えていただいた。葉を虫が食べ、標本が採集しにくいとのことであった。

クロハシテンナンショウ *Arisaema monophyllum* Nakai form. *atrolinguum* (F. Maek.) stat. nov.

2009 年 5 月 13 日、県森林インストラクター植物班の女川、黒沢の両氏がヒトツバテンナンショウの品種クロハシテンナンショウを、松田町寄の成長の森管理道終点の標高 480m の場所で確認したので報告する。

発見地は、川砂の堆積した小広い場所に、土嚢が置いてあり、その土嚢から 1 本のエビネが生え、山側からは伏流水が流れている場所である。

仏炎苞の基部が楕円形をして、内面が特に黒ずんだ紫色であった。また、先が鞭のように長く伸び、仏炎苞の外側は紫色の縞があった。小



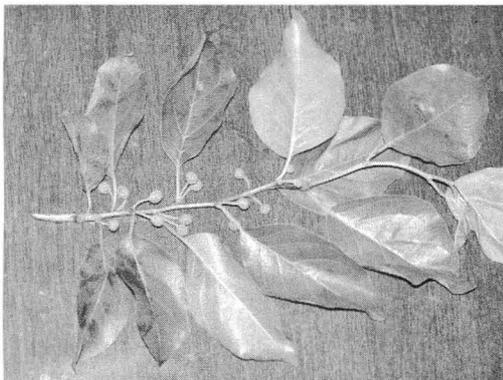
クロハシテンナンショウ (松田町寄 2009 年 5 月 13 日 黒澤隆 撮影)。

葉は9裂し、高さ53cm、根元径2cmで、長さ1.9cmの多肉質の花序があり、栄養状態は良さそうであった。島岡 功氏がこの地で2株を確認しており、浜口（2002；Flora Kanagawa, (53): 639）は山北町篤沢の東沢林道で報告している。

ハリグワを確認

（吉田三夫）

2009年5月15日秦野市の頭高山に行きました。分からない植物が畑の脇の雑木林の縁に生育しています。花（蕾）と葉を採集して持ち帰り、調べてみたら、ハリグワ *Maclura tricuspidata* Carrière（クワ科）でした。『神植誌01』に記載がありませんでしたので、写真と共に報告します。
標本：秦野市千村頭高山 吉田三夫 2009年5月15日 KPM-NA0143500.



ハリグワ（秦野市千村頭高山 2009年5月15日 吉田三夫 撮影）。

茅ヶ崎市でコバナヤマモモソウ

（田中徳久）

2009年9月29日、茅ヶ崎市の三輪徳子さんから、標本の写真が添付されたメールを、植物誌調査会の新しいメールアドレス kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp 宛にいただいた。だが、実はこのメールアドレスに届いたメールは、三輪さんのものが初めてで、気づかずに回答もしないまま年を越してしまった。明けて2010年、いよいよ遅れていた FLORA KANAGAWA の編集に取り掛かろうと作業を始め、このメールに気づいた次第である（三輪さん、ごめんなさい）。さて、本題である。

メールの内容は、茅ヶ崎市文化資料館に提

出された標本が、「コバナヤマモモソウではないか？」ということになったが、同定を確認して欲しいというものであった。

勝山さんと確認したところ、写真での同定であるが、コバナヤマモモソウ *Gaura parviflora* Douglas に間違いなさそうであるので、報告することにした。三輪さんメールによると、2008年に初めて生育していることに気づき、2009年にも5-6本があったが、三輪さんが確認に訪れた時にはなくなっていたそうである。

なお、本種には、イヌヤマモモソウの別名もあるようで、少し調べてみた。コバナヤマモモソウの名は、『琉球植物誌』（1971）で、初島が新称したもので、『日本の帰化植物』（平凡社：2003）、『FLORA OF JAPAN IIC』（講談社：1999）などで使われている。一方、イヌヤマモモソウの名は、『日本帰化植物図鑑』（北隆館：1972）、『日本帰化植物写真図鑑』（農文協：2001）などで使われており、久内（1961；植物研究雑誌, 36: 367）によれば、明治時代に渡来した本種に小石川植物園で与えられた名である。ここでは、取り合えず『日本の帰化植物』（平凡社）に従い、コバナヤマモモソウの名を使った。

標本：茅ヶ崎市香川間門 野田瑞江 2009.7.23
茅ヶ崎市文化資料館 8528.



コバナヤマモモソウの標本写真（茅ヶ崎市文化資料館 8528）。

市街地のクスノキに着生したシノブ

（浜口哲一）

平塚市南原にある平塚市民病院前のバス停の

背後に植えられたクスノキの幹にシノブが着生しているのを見つけた。気づいたのは、2009年11月21日のことで、それまで何度となく利用しているバス停なのにかつなことであった。クスノキは胸高周囲約150cmで、シノブは地上3m~4mの位置の北西側に着生していた。葉が50枚ほど出た立派な株で、相当の年数が経っているものと思われる。バス停横の街路樹とはいえ、達上ヶ丘公園に隣接した場所なので、木立が連続しており、一応樹林環境と言える場所である。立地や周辺の分布状況から考えて、純粋に野生の個体とは言えないだろうが、こうして大きな株に生長する条件があったことは喜ぶべきであろう。



シノブ (平塚市南原 2009年11月21日 浜口哲一 撮影)。

ハコネキンミズヒキとノキンミズヒキ (芹沢俊介)

本誌68号に、支倉千賀子氏が箱根仙石原等にオオキンミズヒキ *Agrimonia noguchii* Seriz. があることを報告している(支倉, 2009)が、実はこの植物はオオキンミズヒキとは少し異なるものである。オオキンミズヒキを記載した時(芹沢, 2008)に仙石原の植物について触れておけばよかったのだが、そうしなかったのも、言い訳を兼ねて少し経緯を書いておこうと思う。

オオキンミズヒキの記載にあたっては当然のことながらいくつかの標本室の標本を検討させていただいたが、そのうち国立科学博物館には、オオキンミズヒキに似ているが全体に小型で、葉が茎の下部に集まってつき、小葉も小さい植物の標本が6点(神奈川県箱根仙石原産1点と静岡県富士宮市朝霧高原産5点、仙石原産は奥山春季 20519, 1957.9.6)収蔵されていた。これらの標本は、葉が茎の下部に集まってつき、小葉も小さいという点で、ヨーロッパの *A. eupatoria* L. に似たところもある。しかし、産地として示されている場所のうち朝霧高原の「東海自然歩道1000m」や「麓川上流1200m」は、地形図で見るとかなり山の中で、帰化植物が生えそうな場所ではない。関東地方南部から静岡県東部にかけての地域に、オオキンミズヒキに近縁であるが、それとは違うもう一つの新分類群が生育している可能性もある。とにかくオオキンミズヒキと全く同じものでないことは確実と思われたので、この型については現地調査の後に改めて検

討しようと考え、とりあえずは何もふれないままにしておいた。

そのようなわけで2008年9月1日に、朝霧高原に調査に行った。「標本は何点かあるのだから、多分それほど稀なものではない。行けば簡単に見つかるだろう」とたかをくくって出かけたのだが、いくら探してもそれらしい植物は見あたらない。「東海自然歩道1000m」などは場所がピンポイント的に特定できるが、そのあたりは森林の中で、問題の植物はもちろんのこと、普通のキンミズヒキさえ生育していない。これはダメだと帰りかけ、それでも気を取り直してもう一周違う場所を歩いてみたがやはり見つからず、がっかりしながら朝霧高原道の駅に戻る最後の最後、もう道の駅が見えるあたりになって、牧場の縁でやっと1株、変なキンミズヒキに行き当たった。あったのは1株だけで、周辺を丁寧に探してみたが、それ以上は見つからなかった。この株は、全体に大型で毛が多く、托葉が大きく、花も大きいことは *A. eupatoria* とオオキンミズヒキとも共通だが、オオキンミズヒキと異なり、甘酸っぱい香りは全くない。花序は長く伸びて45cmに達し、これはまさに *A. eupatoria* の特徴である。果実はまだ未熟で、大きくてもとげを含めて長さ、幅とも7mm程度しかなかったが、周辺部のとげは開出し、この点も *A. eupatoria* に一致する。花期にロゼット葉が残存していないという点で *A. eupatoria* subsp. *eupatoria* とは異なるが、*A. eupatoria* の中にはロゼット葉が残存しない亜種もあるし、丈の高い草の間に生えていたからロ

ゼット葉が消えてしまったのだとも考えられる。由来という点では、牧場内に生育しているのだから、牧草と共にヨーロッパから入ってきたと考えるのはむしろ当然のことである。それなら、問題の植物も *A. eupatoria* かもしれない。国立科学博物館にあった6点の標本がどれも全体にやや華奢であるのは気にかかるが、見つからないものは仕方ない。1960年代末の朝霧高原は牧場や別荘地の造成が進み、盛んに開発されていたと思われる。また、東海自然歩道が開設された時には、その工事に伴って当然山中も攪乱されたはずだし、開設当初は訪れる人も多かったと思われる。キンミズヒキ類の種子は人の衣服について運ばれる。牧場内に一次帰化した *A. eupatoria* が人の往来に伴って山の中まで拡散したが、その後開発が沈静化し、森林化も進行して、拡散したものはほぼ全部消滅し、牧場内だけに僅かに残存している状態になったというのは、あり得ない話ではない。一応そのように考えてはみたが、どうもすっきりしないと思っていた時に支倉氏の報告があったので、生命の星・地球博物館の勝山輝男氏に、「問題の植物は帰化植物の可能性があるが、どのようなところに生えていますか」と問い合わせた。そうしたら、「仙石原はともかく、箱根外輪山の防火帯の草地のような場所にも生育している。とても帰化植物とは思えない」との返事、そこで2009年9月13日にご多忙中の勝山氏を煩わせて、自生地を見せていただいた。自生地を見れば、確かに帰化植物とは考えられないものであった。*A. eupatoria* とは、形態的にも小葉が薄く、辺縁の鋸歯が鋭くないこと、花序が果実期にそれほど長く伸びないこと、果実の外側のとげがほとんど開出しないうことで異なる。一方オオキンミズヒキとは、葉が茎の下部に集まってつき、小葉が小さいことのほか、生育環境も異なる。オオキンミズヒキは、沢沿いの林道のわきなどに生育していることが多い。オオキンミズヒキの特徴である甘酸っぱい香りは、元気のよい株ではほとんど分らなかったが、しおれかけの株ではかすかに認められた。静岡県愛鷹山北麓の十里木にもまわっていたが、そこにも問題の植物が生育していた。葉は通常茎の下部に集まるが、ススキ群落の中に生育している個体はその傾向があまりはっきりしない。オオキンミズヒキを記載した時に分布情報としてあげ

た標本のうち、十里木産のもの（近田文弘 7185 1968.8.25 TNS）は同定の誤りである。分布域を整理してみると、オオキンミズヒキは東北地方から紀伊半島、中国地方まで本州のほぼ全域に生育しているが、特に多いのは、山形県から福井県にかけての日本海側の山地である。関東南部から八ヶ岳、南アルプスにかけての地域は現在のところ空白地帯になっている。一方問題の植物は、箱根、愛鷹山北麓、富士山西麓の、太平洋側気候が最も著しい地域に分布している。「ハコネキンミズヒキ」として、オオキンミズヒキから亜種の階級で区別するのがよさそうである。太平洋側のもは葉が茎の下部に集まる傾向があるという点ではマツムシソウとアシタカマツムシソウの関係に似たところもあるが、ハコネキンミズヒキの場合はアシタカマツムシソウと異なり、葉が厚くなる傾向はない。一方マツムシソウとアシタカマツムシソウは分布が接しているが、オオキンミズヒキとハコネキンミズヒキは、現在分かっている限りでは分布域が離れていて、中間にどちらも分布しない地域がある。

ハコネキンミズヒキは、尾根の草地に生育する植物であるが、草地ならどこにでもあるというものではない。また、痩せて安定した、いかにも「良好な」草地中央部には生育しておらず、ほとんどは林縁に近い路傍に生育している。このような場所は遷移が早く、草刈りが継続されない限りキンミズヒキ類が生育し続けることは難しい。そのような意味でハコネキンミズヒキは、かなり危機的な植物である。また、ハコネキンミズヒキが生育している場所は、かなりの確率で土が掘り返されている。最初は意味がよくわからなかったが、そのうちに地下部が食べられてしおれかけたものがあり、イノシシが地下部を好んで食べるのではないかと思いついた。それなら余計に危機的である。実は愛知県瀬戸市のオオキンミズヒキは、イノシシに地下部を選択的に食べられて全滅している。皆様の注意深い観察をお願いしたい。

一方 *A. eupatoria* は、今のところ1株確認しただけだが、ついでにこれも「ノキンミズヒキ」という和名を与えておく。ヨーロッパでは普通の植物らしいから、今後本州中北部や北海道の牧草地などに広がるかもしれない。これも、そのようなものが出現する可能性があるということで、気にかけていただければ幸いである。オオキンミズヒキ

とハコネキンミズヒキはおそらくキンミズヒキよりキンミズヒキに近縁な植物で、三者の区別点をまとめると以下ようになる。

花序は果実期に著しく長く伸びる。果実は大型で、外側のとげは開出する。葉縁の鋸歯は鋭い。葉は通常茎の下部に集まってつく。

ノキンミズヒキ
花序は果実期にもそれほど伸びない。果実はやや小さい。葉縁の鋸歯は鈍頭。

植物体は大型で強壯、葉は茎の中～下部に分散してつき、頂小葉は長さ4-6.5cmである。

オオキンミズヒキ
植物体はやや小型、葉は通常茎の下部に集まってつき、頂小葉は長さ2.5-4.5cmである。

ハコネキンミズヒキ

引用文献

支倉千賀子, 2009. 箱根町仙石原周辺のキンミズヒキ属の植物について. *Flora Kanagawa*, (68): 828.

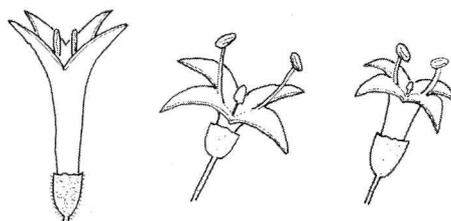
芹沢俊介, 2008. キンミズヒキの再検討 (2) 分類学的考察. *シデコブシ*, 1: 37-44.

セイヨウイボタの花について

(浜口哲一)

セイヨウイボタ (ヨウシュイボタ) *Ligustrum vulgare* L. は、プリペットという名でしばしば生垣などで使われる花木であるというが、身近で観察する機会に恵まれなかった。ところが、今春気がついてみると、勤務先の神奈川県平塚キャンパス (平塚市土屋) に数本が植栽されており、さらに同校の遊水池周辺には逸出して完全に野生化している数株があることが分かった。関西では、河川敷などに逃げ出して増えているという情報があるので、神奈川県でも今後増えていく可能性があるかもしれない。

イボタ属の見分けに、雄しべの葯全体が花冠から出ているかどうかのポイントになるのは周知のことである。セイヨウイボタについて、『神奈川県植物誌 2001』では、「抽出しない」と記述されているが、実際に観察してみると、花冠はネズミモチよりもさらに深く四つに裂けており、雄しべは完全に花外に飛び出しているし、雌しべの先もよく見えている (図)。その意味で、イボタノキと混同する可能性はないと言ってよい。むしろネズミモチに花が似ているが、セイヨウイボタは



イボタ類の花 (左からイボタノキ, セイヨウイボタ, ネズミモチ)。

落葉性で葉が薄いので簡単に見分けられる。

さて、余談になるがイボタノキの花を観察していた時に、ニホンミツバチが数多く訪花していた。しかし、行動が何かおかしいのでよく見てみると、花冠の基部に横からとりついて口を差し込み、盗蜜を行っていた。一方、セイヨウイボタの花にもニホンミツバチがやってきていたが、こちらでは花に頭を入れて通常の吸蜜を行っていた。ニホンミツバチの口の長さを測ってみると、約2.5mmであり、セイヨウイボタでは辛うじて蜜が吸えるが、イボタノキではまったく届かない長さであった。ハナバチ類の状況に応じた行動の柔軟さを改めて感じた次第である。

守矢先生を偲ぶ

(浜口哲一)

2009年10月16日、長年にわたって植物誌調査会を支えてこられた守矢淳一先生がご逝去された。享年90歳であった。

守矢先生の訃報に接してまず思ったのは、「寂しくなるな」ということであった。声を荒げたり、

我を張ったり、人をなじったり、そういうこととまったく無縁だった先生は、いつも温厚で、誰にでも暖かく接して下さった。その人柄に誘われて、植物を見る楽しみに目覚めた人は数多いし、そうした方に出会うことは、もう二度とないのではないかと、そんな思いも湧いてくるのである。

私が初めて守矢先生とお会いしたのは、平塚

市に勤めた1973年のことであった。当時、博物館は建設準備中で、小中学校の先生などの中から調査委員ということで何人かの方に力添えをお願いしていた。そのお一人が守矢先生だったのである。先生が、日本シダの会で師事されていた倉田悟先生が、私にとっても大学時代の恩師であったご縁もあって、すぐに打ち解けていただくことができ、その後の長いお付き合いが始まったのであった。

特に印象深く思い出すのは、1974年4月28日、平塚の植物を案内するからと、吉沢の丘陵地にご一緒した時のことである。雑木林の尾根道ではキンラン・ギンラン・ササバギンラン・エビネなどの春のランに出会い、谷に降りてはいろいろなシダの所在を教えて頂いた。ヘラシダ・キョスミヒメワラビなど平塚では珍しいシダを見せて頂き、いろいろなイノデ類についても教えて頂いた。ハコネオオクジャクの株なども案内して下さったのだが、毎年1枚ずつ葉を採集して株を絶やさないように観察を続けているといったお話にびっくりしたものであった。イチリンソウの生える土手とか、ヒロハノカワラサイコの出る野道などの貴重な情報も惜しげなく示してくださり、新米学芸員としては非常に充実した1日を過ごすことができたのであった。

1973年10月から1974年9月にかけては、当時、博物館建設準備室で刊行していた「博物館通信」という広報誌に「平塚の野外植物」という記事を9回にわたって連載していただいた(守矢, 1973-74)。その内容は、ずっと後に『日本の生物』という雑誌で、「都市化と生物」というタイトルで平塚市の自然を特集した時に、「平塚の植物 40年間の盛衰」(守矢, 1990)という記事として要約していただいた。この記事の中で、先生は減少が著しい植物として、砂浜の植物、雑木林の植物と並んで、原野湿地の植物をあげておられる。それらは、砂丘列の間の湿地に自生していたというもので、ミズユキノシタ・ヌマトラノオ・フタバムグラ・アゼトウガラシ・タウコギ・ヒナガヤツリ・ウキヤガラ・アゼテンツキ・メアゼテンツキ・セキシウモ・ヒキヨモギ・フジバカマなどの名があがっている。そのほとんどは、平塚からは絶滅したと思われるもので、守矢先生がいなければ平塚にあったことさえ、誰も知らなかったであろう。定点観測者としての守矢先生

の功績の大きさを感じるのである。

博物館建設準備室では、次のお願いとして平塚市内の植物の目録作りを依頼することになった。もともとは、今までの記録を集成してレポートとしてとりまとめていただきたいというお願いであったのだが、先生の方で証拠標本も博物館に収めましょうと申し出てくださった。その結果、まとまったのが「平塚市野外植物目録」(守矢, 1979)であり、その中にはシダ植物、種子植物を合わせて919種類が記録されている。そして、証拠標本として約900点を寄贈していただくことができ、平塚市博物館の貴重な基礎資料とすることができたのであった。

博物館が開館してからしばらくたって、神奈川県植物誌調査会がスタートした。平塚市博物館が湘南地域のとりまとめを担当することになり、湘南ブロックという集まりが発足した。藤沢、茅ヶ崎、秦野などで観察を続けていたメンバーが集結し、調査に取り組んでいくことになったのだが、全員一致で迷うことなく守矢先生に代表をお願いすることになった。それから、つい最近体調を崩されて野外に出ることが難しくなれるまで、30年近く代表を務めていただいたのであった。

一つ思い出すのは、調査が始まって間もなく、分担地域を決める時のことである。私としては、仕事との関係もあって平塚を受け持ちたいと思ったのだが、実績のある守矢先生を差し置いて、という気持ちもあって、おそろおそろお伺いをたてにいった。すると、では私は「伊勢原や大磯を受け持つから、平塚は任せましょう」と言ってくださった。先生の人柄を改めて強く感じた場面であった。

湘南ブロックは、チームワークよく活動を続けてくることができたが、それも守矢先生あってのことだったと今強く思うのである。ご冥福を心からお祈りしたい。

文献

- 守矢淳一, 1973-74. 平塚市の野外植物 (1) ~ (9). 博物館通信, 2(10) ~ 3(9). 平塚市博物館建設準備室.
- 守矢淳一, 1979. 平塚市野外植物目録. 自然と文化, 2. 平塚市博物館.
- 守矢淳一, 1990. 平塚の植物 40年間の盛衰. 日本の生物, 4(10): 30-35.

2009 年度総会の報告

(事務局)

2009 年 4 月 25 日 (土), 生命の星・地球博物館講義室において, 2009 年度の役員会・総会が開催され, 報告・議事とも, 一部修正はありましたが, 了承されました。以下の報告は当日の修正などを反映したのですが, 紙面の都合で一部省略しました。なお, 総会終了後には, 城川四郎氏による花の万博記念奨励賞受賞の報告に加え, 勝山輝男氏によるタンザワサカネラン, 宮崎 卓氏による相模原市の新市域の調査についての話題提供をいただきました。

- 2008 年度 事業報告

- 2008 年度 決算報告・監査報告

- 各ブロックの活動報告

- 2009 年度 運営体制

- 2009 年度 予算

[特別会計]

● 2008 年度 事業計画

Flora Kanagawa の発行

『神奈川県の花ごよみ』の実費配布について

※ 1 冊 500 円 (送料別) の実費で配布する。

Flora Kanagawa ・『神奈川県植物誌 2001』正

誤表のインターネットでの公開、『神奈川県植物誌 2001』2002 年 2 月以降の正誤表の作成について

※公開, 作成する方向で検討する。

標本データベースの維持・管理

※ブロックでの同定会などの講師への謝金・交通費等の支出については, これまでどおりボランティアの相互協力の観点から支出しない方向で共通理解を持つ。

次の『植物誌』へ向けてのロードマップの検討

※会員が参加できる小規模な調査 (特定の種の分布把握など) により, 次の調査の下調べとなるようなものを計画・実施する。

事務局より

会則について

神奈川県植物誌調査会の会則は, これまでの付則では, 「会則は 1979 年 1 月 27 日より実施する。」とされていましたが, 資料を確認したところ, 1979 年は誤りで, 1980 年でした (Flora Kanagawa (3): 13). 会則の改正ではなく, 誤りの修正として, 以下に掲載しました。

神奈川県植物誌調査会 会則

- ・本会は神奈川県およびその隣接地域の植物相を調査し, その成果を刊行することを目的とする。
- ・本会は神奈川県植物誌調査会といい, 事務局を神奈川県立生命の星・地球博物館 (小田原市入生田 499) 内におく。
- ・本会の目的に賛同し, 会費 (年額 2,000 円) を納入するものをもって会員とする。
- ・本会は, その目的を達成するために次の事業を行なう。
 1. 別に定めるブロックごとの具体的な植物相調査, 標本の収集・集積などの活動
 2. 会報の発行, 諸成果の刊行
 3. 植物に関する研究会, 観察会, 講演会等の開催
 4. その他役員会で必要と認める事業

- ・会の運営にあたり次の役員をおく。任期は 2 年とするが, 再任は妨げない。

代表 1 名, 運営委員 (10 ~ 20 名程度),
ブロック事務局員若干名, 事務局員 (庶務・会計) 若干名, 会計監事 (2 名)。

- ・本会は役員合議によって運営する。事業目的によっては特別委員会をおくことが出来る。
- ・役員を選出, 会則の改正は総会の承認を得て決定する。
- ・総会は年一回開催する。

付則

本会は 1979 年より 1988 年「神奈川県植物誌 1988」刊行までを第一期とし, 1989 年より 2001 年「神奈川県植物誌 2001」刊行までを第二期, それ以降を第三期とする。

会則は 1980 年 1 月 27 日より実施する。

1989 年 4 月 8 日改正

2007 年 4 月 21 日改正

No.68 の正誤

833 頁右上の写真のキャプションが 1 行欠けてしまいました。正しくは「マツバウンランの越冬の様子 (平塚市土屋神奈川大学構内 2008 年 12 月 1 日 浜口哲一 撮影)。」になります。著者の浜口哲一氏にはご迷惑をお掛けしました。申し訳ありません。

目次 (835 頁から続く)

浜口哲一：守矢先生を偲ぶ.....	846
事務局：2009 年度総会の報告	848
事務局より.....	849
編集後記.....	850

横浜植物会、創立 100 周年を迎える

日本最初の植物同好会として知られる横浜植物会が 2009 年 10 月、創立 100 周年を迎えました。新版神奈川県植物誌『神奈川県植物誌 1988』刊行の声は、横浜植物会の中から生まれ、当時の神奈川県立博物館の高橋秀男、大場達之の両氏の発起、県内博物館の協力、そして、今の神奈川県植物誌調査会の活動へとつながっています。

また、横浜植物会ではこの創立 100 周年を記念し、『横浜植物会の歴史－創立 100 周年記念誌－』を刊行しました。写真や資料による会の歴史、会員の声、記念誌のために書かれた植物関係の報文など、B5 判 382 頁の大作です。一般の方にも 3,500 円＋送料 (500 円) で頒布されていますので、横浜植物会事務局 horikawa@now.mfnet.ne.jp までメールでお申し込みください。

書籍の紹介

日本では長い間、広く Engler の体系が用いられてきました (被子植物の場合) が、週刊朝日百科『植物の世界』で Cronquist の体系が採用され、戸惑った方も多いのではないのでしょうか。また、ユリ科などを細分する APG の体系が一般の新聞でも紹介され、世間を賑わせた (!!) のも記憶に新しいところです。

そんな折、昨年 (2009 年) 11 月、期せずして大場秀章 (編著)『植物分類表』(アボック社; 3,500 円) と邑田仁 (監修)・米倉浩司 (著)『高等植物分類表』(北隆館; 2,500 円) の 2 冊の分類体系に関する本がほぼ同時に刊行されました。

それぞれが紹介している分類体系が多少異なり、前者の『植物分類表』には分類体系の変遷に関しての読み応えのある総説やそれぞれの体系が掲載されており、後者の『高等植物分類表』はコンパクトで、これまでの体系との比較がしやすいように工夫されています。どちらを買うか悩むところですが、やはり両方でしょうか…。

総会のご案内

2010 年度の総会は、2010 年 4 月 11 日 (日) 13 時より、神奈川県立生命の星・地球博物館において開催されます。講演会も予定していますので、ぜひご参集ください。

編集後記

2009 年 10 月 16 日、長く会の運営委員、湘南ブロックの代表としてお世話になった守矢淳一氏をご逝去されました。これまでの会へのご協力・ご指導に感謝し、深く哀悼の意を表したいと思います。湘南ブロックの浜口哲一氏には、追悼文をお寄せいただきました。ありがとうございます。また、今号には、愛知教育大学の芹沢俊介氏に「ハコネキンミズヒキとノキンミズヒキ」を特別にご寄稿いただきました。感謝いたします。

今号は大幅に発行が遅れ、会員の皆様にはご心配をお掛けしました。特に早くから原稿をお寄せくださった方々にはお詫び申し上げます。発行が遅れましたが、通常の号の 2 倍のボリュームにはなったのですが…。事務局のある生命の星・地球博物館の内部事情ですが、木場学芸員に続いて、植物 (菌類) 担当の出川学芸員が転出した影響も大きく、今、4 月の総会の議事録を見直してみると、「検討する」「実施する」という部分が何も進んでいないことに気付き、反省しきりです。前号の編集後記では、次号を「総会後に発行したい」と記しました。ずいぶん遅い“総会後”になりましたが、次号は“総会後すぐに”発行できるよう努力致しますので、会員の皆さんの原稿をお待ちしております。(田中徳久)

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499

神奈川県立生命の星・地球博物館内

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195

加入者名 神奈川県植物誌調査会

年会費 2,000 円